
echo of sea

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

e c h o o f s e a

【Nコード】

N 8 2 4 8 G

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

わたしは、ふらふらと誘われるように海へと入る。いつたい、わたしを呼んでいたのは誰だろう。そして、わたしはいつたい誰を呼ぶのだろうか。

まるで燃えているような、真っ赤な夕日。

その夕日を反射して、赤く揺らめく深い海。

わたしは、きっとそこで生まれたのだろうと思った。

そして今、わたしはその海で死んでいく。

わたしの体は、ゆらゆらと漂いながら、海の底へと沈んでいく。
海へと入ってから、どれくらいの間が経ったのだろう。

感覚は麻痺して、けれど意識は鮮明だった。

視界に映る色は、深い蒼の色。

もう光すらも届かない深さにいるはずなのに……

わたしの頭の中には、あの赤い海が焼きついていて。

体と同じように思考もゆらゆらとしていて、とりとめのないことを考えていた。

たとえば。

最初、海の上の方では、必死にもがいてもがいて、とても苦しかったのに。

今はどうだろう。静かで、緩やかで、心地よささえ感じてしまうほど。

なあんだ、底まで沈んでしまえば、楽じゃないか。

大きな泡を吐きながら暴れていた自分が、酷く滑稽に思えた。

一生も同じようなものなのかな。

ふっと、一瞬そんなことを考えた。

それは泡みたいにはじけていった。

何度も何度も、同じようなことを考えて、いつたりきたりの思考が辿り着いたのは。

この海に入る前のことだった

その日、わたしはあの人と会う約束をしていた。
指定の場所で、待ち合わせをして。あの人に来て、わたしはとても喜んでいた。

それなのに、あの方はわたしをタクシーに乗せた。行き先は、最寄の駅だった。

どうして。

わたしの頭の中は、そのことで埋め尽くされていた。

これから、買い物をしたり、食事をしたり、語り合ったり。

そういうことをするはずなのに、どうしてわたしを帰そうとするのだらうと。

だから、感情のままに、あの人にわたしは尋ねたのを覚えている。どうしてなの？ と。

あの方は、小さな声でたった一言だけ喋ってくれた。

もう終わりにしよう。

その声は、小さいけれども、揺らがないであろう意思を持っていた。

何をいつても、わたし達は終わってしまうのだなと思った。

その後に、理由が知りたい、と思った。

あの方が結婚しているのは知っていたけれど。

それが原因なのかどうか、わからないままなんて。

もやもやしてとても嫌だった。

だから、あの方に必死にすがりついたのだけれど、何も言ってくれなかった。

それが悲しくて寂しくて、わたしはタクシーを止めて、下りた。家に帰りたくもなかったから、適当なホテルを探して泊まった。

その後、一人でひとしきり泣いた。涙が枯れてしまうかと思うほど。

泣くだけ泣いたら、何故かすっきりしていた。

あの方のことはもう忘れよう。そう思っていたはずなのに。

知らない街を、一人で彷徨い歩いて。

新しい洋服や、靴、化粧品。

色々な物を買っては、妙に弾んだ気持ちでいた。

沈み始めた頃は、どうして自殺したのかわからなかった。

ひとしきり買い物をして、何処へ行こうかと考えながら、わたしは歩いていた。

そうしたら、潮の香りがどこからが漂ってきて。

自然と足は、その香りの方へと向かっていた。

気が付いたら砂浜にいて、目の前には赤い海があった。

そしてわたしはサンダルのまま、ふらふらと誘われるように海へと入った。

今なら、どうして海へ入ったのかわかるような気がする。

誰かに、呼ばれていたのかもしれない。

わたしみたいに、海へと消えていった見知らぬ誰か。

その人達の声が、木霊みたいに響くから、誘われてしまったの。変なことを考えてるな……と思って、わたしはたぶん笑った。

声は出ないから、口の形を歪めてみただけだけれど。

少しだけ、沈む速度が速くなったような気がした。

周りの景色は変わらないから、確かめようがないのだけれど。

ぼんやりと、終わりが近いのかなあ、と思って。

無意味だと知りながら、胸の内を吐き出してみた。

もっと生きたいとか、死にたくない、とかそういうことじゃなくて。

お店の美味しいケーキが食べたいな、とか、もっとオシャレしたかったな、とか。

もっと、色んな恋愛がしたかったなとか。

どれも、みんな同じようなことに思えた。

言葉にも音にもならない想いは、小さな泡になった。

だんだんと意識が朦朧としてきて……

わたしは、わたしでなくなるんだな　　と思った。

怖くはない。悲しくもない。ただ、淋しかった。

ゆらゆらと浮かんていった泡は、やがて木霊になるのだろう。

そうして、わたしもまた、淋しい誰かを誘うのだろう。

木霊の海に抱かれながら、わたしは静かに溶けていった。

（後書き）

お読みくださり、ありがとうございました。

よく海って、連れて行かれるとかいいますよね……？

そんな所から、イメージして出来ました。

でも実際、何事おいても、沈んでしまえば、ある意味では楽になれますよね。

あえてもがくのですから、人間とは不思議なものです。

読み終えた後に、何か感じていただけたら、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8248g/>

echo of sea

2010年12月30日14時19分発行